

---

# わがままな魔女

伽羅鴉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

わがままな魔女

### 【Nコード】

N7465H

### 【作者名】

伽羅鵑

### 【あらすじ】

おとぎ話や昔話が好きな、不思議な力を持った少女。そして彼女は物語の結末に不満を持っていた。そんな少女がひとりの青年を引き連れて、様々な世界をまわる。人は彼女を魔女と呼んだ。

## 人魚姫の世界へ

白一色で統一された部屋。

そこに置かれている天蓋付きのベット、いわゆるお姫様ベットにうつぶせに寝転がっている少女。

眩いばかりの金髪を腰まで伸ばし、同色の睫に縁取られる瞳はガーネットをはめ込んだような紅。

所々にフリルをあしらった膝上のワンピース。

そこからのぞく足をパタパタと動かす度に、ヒラヒラと波うつ裾が危うい。

と、パタパタと動いていた少女の足を押さえる手。うつぶせていた少女は上半身をひねり振り返る。

少女が振り返った先にいたのは、ひとりの青年。

闇を閉じ込めたような黒色の髪に同色の瞳は、オニキスのように鈍い光をたたえている。

Vネックのセーターにブラックジーンズと全身を黒に統一している。

「スカートで足を上げるなっっていうつも言ってるだろ！」

「むう。私たち以外居ないんだから別にいいじゃん」

「いいわけあるか！」

しばらく互いににらみ合っていたが、少女がため息をついてベット座り直す。

それを見届けて青年は少女にたずねた。

「やけに静かだったが何してたんだ？」

その言葉に少女は満面の笑みを浮かべ、青年の前に一冊の本を突き出した。

「……人魚姫？」

「そう！」

嬉しそうに頷く少女に、青年は背中に冷たい汗が流れるのを感じた。

「お前、まさか」

「気に入らないの」

少女の言葉に青年の肩がびくりとはねた。

目に見えて顔色が悪くなり、目は泳いでいる。

「でも、仕事があるだろ？」

青年はなんとか言葉を紡ぐが、すでに少女の耳には入っていない。

「そんなのあとあと。じゃあ、人魚姫の世界にレッツゴー！」

少女のかけ声で突然豪華な扉が現れた。

うなだれる青年に構わず、少女はさっさと扉をくぐってしまう。

青年はため息をつくとき、少女の後を追って扉をくぐった。

## 扉の向こう

扉を抜けたらそこは空でした。

「そんなこと言ってる場合か！」

扉を抜けた先に地面は無く、ふたりは重力に従い落下を続けている。しかし、落下地点にも地面は無く、青い海が広がっていた。

「海かぁ、落ちても大丈夫かな？」

コトリと首を傾げる少女に青年は眉間にしわを寄せ首を振る。

「この高さじゃ、下が海でも高確率で死ぬぞ」

そうは言うが、青年からは全く焦った様子などは見られない。それは少女も同じである。

が、海はグングンと近づいている。

「手を」

青年は少女に手を伸ばす。

少女も青年に手を伸ばし、体に抱きつく。

バンツという音と共に青年の背から漆黒の翼が飛び出した。

「セーフ。さて、ここどこかな」

青年の肩に手をかけ、辺りをキョロキョロと見渡している。

「どこ、というよりどの場面かだろ？」

抱き抱えている不安定な状態で動く少女にヒヤヒヤしながら、収まりの良い位置に抱え直す。

「んゝ、多分もう王子に会ってるとは思っただけど」

「とりあえず陸に行くか？」

「うん」

少女の返事を聞き、青年は陸に向かって飛び上がった。

「それにしても、お前の移動はどうにかならないか？」

青年は溜め息混じりに少女に声をかけた。

かなりの速度で飛んでいるため、少女の耳元へ唇を押し付けるように囁く。

「どうにかって？」

「せめて土の上に出してくれ」

「えゝ、わかんない方が面白いのに」

少女は青年の首に腕を絡めクスクスと笑う。

楽しそうに笑う少女をチラリと見やり、青年は深いため息をついた。

「わかった、好きにすればいい」

「んふふ、当然。それにこんな風に私のこと抱っこできてうれしいでしょ？」

そう言って少女は青年に満面の笑みを向けた。

「そうだな……」

青年は苦笑しながら頷いた。

上陸！時間の無駄使い！

陸を目指して飛び続けること、約5分。

ふたりは陸に到着していた。

白く美しい砂浜に降り立ったふたりは、ぐるりと辺りを見渡した。

「さつてと、とりあえずお城を探そうか……」と思ったんだけど」

少女が見上げた先には、おとぎ話そのままに大きなお城が建っていた。

海の日と鼻の先に。

「探す必要もなかったな」

「うん。人魚姫ちゃんはもうお城かな？」

スキップでもしそうな程上機嫌に城に向かって行く少女に、青年はふと気になっていたことをたずねた。

「今回はどこが気に入らなかったんだ？」

「王子死ね」

青年は、即座に返ってきた答えにポカリと口を開けた。

「……………は？」

「命の恩人すらわからない馬鹿は死ね」

「……………へ？」

「人魚姫ちゃんを説得して王子を刺させる」

少女の言葉に返す言葉が見つからずに口を閉ざした青年をしり目に、少女はつらつらと自分の意見を述べていく。

「……いや、無理じゃないか？王子を刺せなかったからこそ泡になったわけだし」

「じゃあ、私が殺る」

はつきりと言った少女の言葉に、青年はピシリと固まり、ダラダラと冷や汗を流す。

その後、青年の必死の説得により王子の殺害は阻止。

王子に恩人は人魚姫だと気付かせる方向で話はまとまった。

だが、この時点で時刻は既に深夜になっており行動は明日からと言うことになった。

そして青年は知らない。

この必死の説得も少女には余り意味をなしていないことを。

## その理由

翌朝。

少女は砂浜に落書きをしていた。

いや、正確にはその落書きは魔法陣。

魔女である彼女が力を使うのに必要なものである。

後少しで完成する魔法陣の上に、黒い革靴が重なりその部分を払った。

少女は革靴の持ち主を睨みつけた。

「なにをするの？」

少女のガーネットと青年のオニキスが交わる。

「お前こそ何をしてる？コレは心変わりの陣だろう」

「そうだけど」

「誰に使うつもりだった？」

「人魚姫」

「昨日の話を覚えてるか？」

「覚えてるよ。でも、こっちのが楽し」

「楽だからって、そんな事していいと思ってるのか？」

「昨日からうるさいよ。私の下僕<sup>もの</sup>のくせに」

少女のガーネットが深く濃くなっていくのを見ながら、青年は大仰にため息をついた。

「だからこそ、だ」

青年の言葉に少女は眉根を寄せて、首を傾げる。  
そんな少女を見ながら青年は問いかける。

「人魚姫、好きだろう？」

「？うん」

「もし、人魚姫が王子を刺したら“人魚姫”という話は無くなる」

「うん？」

「嫌だろう？そんなことは」

「！」

青年の言葉に少女は目をパチクリさせている。

元々大きな目がこぼれ落ちそうなほど見開かれる。

「勘違いしているようだから言うておくが、俺は誰が死のうが消えようが興味はない。俺がお前に意見するのは、全てお前のためだ。分かったか？」

少女はコクリと首を縦に振ると魔法陣をぐしゃぐしゃにくずした。  
その場に勢いよく立ち上がると、城をビシリと指差した。

「いざゆかん、人魚姫ちゃんに会いに！」

少女が城に行こうと一步を踏み出すと、砂浜にある岩場から人影が飛び出してきた。

その人影を指差し少女は叫んだ。

「あゝ！あんたはっ！？」



## 物語の細部

「今、人魚と言わなかったか！」  
「王子！」

岩陰から出てきたのは、人魚姫の王子様だった。  
短めに切りそろえられた金髪に空を溶かし込んだような水色の瞳。  
物語そのままの王子様がそこにいた。

「人魚姫の前に王子に会ったがどうする？」  
「どうしよう？」

少女と青年が互いに耳元でひそひそと話し合っていると、王子が間に割り込んできた。

「すまないが、私の質問に答えてもらえるか？」  
「え、あ、うん。別に良いけど」

王子の鬼気迫る様子にとりあえず了承の意を返す。

「先ほど人魚と言ったが、君達は人魚を知っているのか？」  
「知ってると言えば、知ってるけど…」

少女は突然の王子の登場にいまだに混乱しているのか、しどろもどろに答えにならない答えを返している。  
どうも突発的なことに弱いらしい。

青年はそれに息をつく、少女の代わりに王子の質問に答えていく。  
さりげなく、少女を自分の後ろに隠すのも忘れない。

「人魚という存在は知っているが、人魚個人に知り合いはいないな」  
「そう……か」

王子は青年の答えに目に見えて落胆していたが、取りつくろうような笑みを浮かべた。

「いや、いきなりすまない。私はセドナという」  
「俺はシュテラリア。こっちはカメラリアだ」

王子、セドナが名乗ったので青年、シュテラリアも自分と少女の名前を明かす。

「セドナは人魚を探してるの？」

シュテラリアの腕の下から顔だけをだし、カメラリアはたずねた。

「ああ。私を嵐の海から助けてくれた人魚を探しているんだ」

この言葉にふたりは顔を見合わせた。  
王子が人魚の存在を知っていて、なおかつ自分を助けたとわかっているのはどうということだろう？と。

「どうということ？」

シュテラリアに声をかけたつもりが、どうやらセドナにも聞こえていたらしく、セドナが先に口を開いた。

「時間がないんだ、私には。」

セドナの話をもとめるところだ。

嵐の夜に海から自分を助けてくれた人魚に恋をした。所謂一目惚れ。けれど、海の底深くに住む人魚に会えるわけがなく諦めようとしたが、セドナが何者かに助けられたと聞いた隣国の王女が、セドナを助けたのは自分だと王であるセドナの父に言ったのだ。

さらには、人魚がセドナを殺そうとしていたという嘘までついた。これに王は激怒し、人魚を見つけ次第殺せと兵たちに命令したのだ。

「で、セドナは人魚を見つけて陸に上がってくるなって伝えたいの？」

カメリアが聞くと、セドナは真剣な顔で頷く。

「私が彼女と、隣国の王女と結婚すれば王となり父の命令を撤回できる。それまででいいんだ」

「隣国の王女と結婚するの？」

セドナは困ったような笑みを浮かべた。

「しかたがない、今の父に何を言っても聞き入れてはくれないだろう」

その言葉にカメリアの顔が歪む。

その顔を見て、セドナはさらに笑みを深めた。

「そんな顔をするな。父を説得出来なかった私の力不足だ。それに彼女も人間に想われても迷惑だろう」

「……………」

カメリアは複雑そうな顔をして俯いたまま、黙り込んでしまった。  
そんなカメリアにもう一度笑みを浮かべてから立ち去ろうとしたセ  
ドナに、今まで黙っていたシュテラリアが問いかけた。

「口の利けない女に会わなかったか？」

セドナは少し考え、首を横に振った。

## 仕事は大事

去って行くセドナを見ながら、シュテラリアはあることを思い出していた。

セドナが見えなくなると、未だに俯いたままのカメリアに視線を移した。

「カメリア、ひとつ思い出したことが」

ドンと、シュテラリアの言葉の途中でカメリアが抱きついた。シュテラリアの胸に顔をうずめてピクリともしないカメリアの金系の髪を梳きながら、言い辛そうに口の開閉をした後、意を決したように口を開いた。

「人魚姫、まだ王子に会ってなかったろ？」

コクリとちいさく頭が動く。

「ここにくる前に仕事があったろ？」

また、頷く。

「その仕事さ、同業者からだっただろ？」

頷く。

「薬を作ってくれて頼まれたろ？」

ギリりと、体が固まる。

「その薬さ、人間に変身出来るようにするやつじゃなかったか？」

ガバリと勢いよく伏せていた顔が上げられた。

その顔色は、悪い。

「えへ、へへへへへ」

「あは、ははははは」

しばらく空笑いを続けていたが、ふたり同時に砂浜に崩れ落ちた。

「……人魚姫が出て来ないのって私のせい？」

「まあ、あんな命令がでる以上海の底にいる方が安全だろ」

「とりあえず、薬作って持つてく？」

シュテラリアは少し考え、カメラリアの意見に首を振った。

「いや、もう直接人魚姫に会いに行った方がいいだろう」

「それもそうか。じゃあ、海底ヘレッツゴー！」

勢いよく手を上げたカメラリアは、その場にしゃがみ込んだ。

そのまま砂浜に魔法陣を描いていく。

それを見下ろしながら、シュテラリアは首を捻った。

「わざわざ魔法を使わなくても俺がつれてくぞ？」

カメラリアは魔法陣から顔を上げずに答える。

「それでもいいんだけど、たまには使わないとわすれちゃいそうで」

その答えに納得がいったように頷いた。

「それもそうか。この前使ったのっていつだった？」

少し考え、カメリアは答えた。

「シュテラリアと契約する前だから 2、3世紀前かな？」

「そうか。ん、終わったのか？」

「うん、じゃあ行こっか」

## 愚者

海の底、奥深く。

入り組んだ洞窟にある魔女の住処。

本来ならこんな場所に居るはずのない、不釣り合いな存在がひとり。

「ふえ、ふえ、ふえ。初めてお前のような娘が来たときは驚いたが、年頃の娘にありがちな下らん理由じゃな」

しわがれて、耳障りな醜い声。

「……そんな事より、約束の薬はまだですか？」

鈴の音のような、澄んだ美しい声。

「ふん、あの薬は作るのに時間がかかるんじゃ。それより約束は覚えとるな」

苛立ちを隠しもせずに、老婆は美しき人魚姫に詰め寄った。

人魚姫は青い瞳を歪ませ、頷いた。

「わかっています、魔女様。薬と引き換えに私の声を差し上げます」

「ふん、薬ひとつ満足に作れないくせに見返りだけはしっかり要求？」

会話に突然割り込んできた声に、ふたりは弾かれたように振りかえった。

そこには腕を組み、壁にもたれ掛かっているカメラアがいた。

「……？」

「誰じゃお前は！」

キョトンとした顔で首を傾げる人魚姫とは対照的に、老婆はカメラアを睨み怒鳴りつける。

だが、カメラアは老婆には目もくれず人魚姫に歩み寄る。

「はじめまして、人魚姫ちゃん。私が人間にしてあげようか？もちろんタダで」

「え？」

突然の申し出に人魚姫は目を見開いた。

「冗談はおよしっ小娘！」

老婆はさらに大きな声で怒鳴り、シワの刻み込まれた手をカメラアに伸ばした。

が、その手はカメラアに触れることなく弾き飛ばされた。

いつの間にかふたりの間に存在していたシュテラリアによって。

「な！貴様いつの間につ！？」

今まで影すら見えなかった男がいきなり目の前に現れたのだ。

老婆の驚きは当然と言えよう。

手を弾かれた痛みにようやく老婆も頭に上った血が下がったのか、口元に笑みを浮かべた。

「そうか、お前ワシと同類だね？」

カメラリアは僅かに眉間にしわを寄せ、チラリと老婆に視線を寄越した。

「同類？冗談でしょ？」

「同類じゃよ。お前も魔女じゃろう？どこで話を耳にしたかは知らぬが、この娘はワシの客じゃ」

「客ねえ、アンタごときが？ババアはとっと引退して墓に埋まってる」

「ふえ、ふえ、ふえ、口の減らん小娘じゃ。キャリアの差を思い知らせてやる」

老婆が何事かを口のなかで呟くと、老婆を守るように一匹の蛙が現れた。

その体はカメラリアとシュテラリアの目から老婆の姿を隠す程大きく、背には無数のおうつががあり、毒々しい紫色をしていた。

余りの気持ち悪さに、最も遠い位置に居る人魚姫が短い悲鳴をあげ気を失った。

「フロウグ。まずは男から始末するんじゃ」

その言葉と共に蛙の口から体と同色の粘液が吐き出された。シュテラリアはピクリとも動かずに粘液を被った。

「ひゃっひゃっひゃっひゃっ！溶ける溶ける！」

バアアアン！という音をたて蛙が内側から弾け飛んだ。老婆は蛙の肉片を浴びて固まっている。

「で？まさかこの程度で俺を殺せると思ったのか？」

シュテラリアは四方に飛び散ったはずの肉片をひとつも浴びずに、そこに立っていた。

目を見開き、肉片にまみれた老婆は一步一步後ずさり、シュテラリアから離れていく。

洞窟の壁まで下がり、それ以上下がれないことがわかった、その場に座り込んでしまった。

その目には、恐怖と畏怖が簡単に見て取れた。

そんな老婆を一瞥して、カメリアはシュテラリアに声をかけた。

「さっきの使い魔？契約？」

「俺と同じ、契約」

「あんなクズが？」

「まあ、俺達もピンキリだし。相手がこんな干物じゃな」

「ぶっ、確かに」

老婆の存在など忘れたかのように、ふたりはクスクスと声をたてて笑い合っていた。

「それで、この干物どうするんだ？」

「ん？知らない、かな。殺っちゃって」

カメリアは誰もが見惚れる美しい笑みで言った。  
その言葉にシュテラリアが右腕を振り上げた。

『我はソロモン72柱が1柱 大公爵』

人とは違う、明らかに異質な声で朗々と言葉を紡ぐ。  
だが、名前を紡いだはずの言葉だけが理解できない。

『交わりの契約 与えられた名に従い 我が力を解放せん』

全ての言葉を紡ぎ終えた彼の姿は、すでに人間ではなかった。

漆黒の闇が辺りを覆った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7465h/>

---

わがままな魔女

2010年11月30日03時46分発行